

---

# ツンデレな女神とヤンデレな妹に愛されて夜も眠れない

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツンデレな女神とヤンデレな妹に愛されて夜も眠れない

### 【Nコード】

N2192F

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

ヘンゼルとグレーテル＋金の斧銀の斧。グロ注意です。

(前書き)

ヘンゼルとグレーテル + 金の斧銀の斧。グロ注意です。

鈍い音が、森の静寂を破った。

木々が鬱蒼としている森の中。木漏れ日が交錯し、蝶が軽やかに舞い踊る。水が湧き出る音や風で草々が擦れ合う音に、小鳥達がメロディーを加える。

その男の職業は、木を切ってそれを町に売る樵だった。

ボロ布のような服を着た、若い男だった。名をヘンゼルという。成人する頃には両親も亡くし、今は一人で森に住んでいる。人と会うのは時々木材を売りに町へ行く時くらいだった。

人が嫌いなわけじゃない。機会が無かった。故に嫁を娶ろうなどとは思わなかった。自分の代で血筋を絶やしても誰も困らない。抵抗は一切無かった。

昔は妹がいたのだが、家庭のやむを得ぬ事情などで養子に行つて以来、もう会うことは無かった。

彼は木を切っている最中だった。力を込め、木の根本に鉄の斧を一線に薙ぐ。子供の頃から教え込まれているため、かなり慣れていた。

しかし、そんな彼も失敗することがある。手元が狂い、突然腕の力がフツツと抜ける。そんな状態で木を切ってしまい、手元から斧が飛んでしまった。

かなり遠くまで飛んでいった。次の瞬間には、魚が跳ねたような水音が聞こえた。

彼は焦った。あの斧は親から受け継いだ大事な商売道具である。あれが無くなれば生活も困難になる。新しい斧を買うにも、そんなお金は無い。

彼は音がした方へと走った。そこにはやはり、こんこんと水が湧き出る深く大きな泉があった。

辺りを探すが、近くに斧は無い。さっきの音から、この泉に落ち

たとしか考えられなかった。しかし、潜って取りにいける浅さではない。ヘンゼルはがつくりと頂垂れた。

その時だった。泉の水面から、まるで底から溢れ出してくるかのような光が放たれた。まばゆい光にヘンゼルは小手をかざした。

光が収まり、ヘンゼルは少しずつ目を開けた。すると泉の中心に、一人の若い女が立っていた。否、浮遊していた。

白くて上等な麻布で出来た衣服を纏い、長い頭髮は澄み切った清水の如く青い。全体的に細身で、身の丈はヘンゼルより少し小さいくらいだ。整った顔立ちは、女神のような美しさと神々しさがある。事実、彼女はこの泉に棲む女神だった。

ヘンゼルは、一瞬で彼女に心を奪われた。恋愛事などに興味関心の無いヘンゼルだが、彼女だけは別だった。故に、彼女が持っている豪華な造りの二つの斧は、ヘンゼルの目に入らなかった。

「あなたが落としたのは金の斧ですか、銀の斧ですか？」

両の斧を差し出しながらヘンゼルに聞いた。ヘンゼルは首を横に振って答える。

「私が落としたのはそのどちらでもありません。ですが、私はあなたがほしい。もし無理がなければ、私とご交際をして下さい」

すると彼女は凄い勢いで顔を紅く染めた。そしてヘンゼルに言う。

「な、何言ってるのよ。バカじゃない？ ほら、この金が銀、あなたが落としたのはどれ？」

仕方なしにヘンゼルは言う。

「どちらでもありません。私が落としたのは、普通の鉄の斧です」すると、彼女は俯きながら更に頬を染める。

「しょ、正直者……」

「え？」

「あなた正直に鉄の斧落としたって言ったから、返すわよ」

どこからともなく先ほどの鉄斧を出し、彼の前に置いた。彼女は続ける。

「正直に答えたら他に何かあげなきゃいけないんだけど、あんた金

の斧も銀の斧もいらぬのよね」

ヘンゼルは無言でうなづく。その表情には一点の欲も感じられない。

「だ、だったらしょうがないから、代わりにあたしで我慢しなさいよね……」

彼女はヘンゼルへと近付いた。ヘンゼルを抱き寄せ、目を瞑り、その唇を交わそうとする。もうすぐ、二人の唇は触れ合う。

その時だった。

「やめて！」

女の声がした。ヘンゼルは思わず振り返る。

そこには、年の頃十代の半ば程の若い娘が立っていた。

触れれば溶けてしまいそうな桃色の柔らかく短い髪。木綿の服からは一点の曇りも無い白磁のような肢体が覗く。目は大きく、純度の高い宝石のように透き通り、輝いている。

ヘンゼルは一瞬彼女が誰だか分からなかったが、すぐに思い出した。

「グレーテル！」

そう、彼女は昔養子に出されてヘンゼルと生き別れた実の妹、グレーテルだった。

「お兄ちゃん」

グレーテルはそう叫ぶと、本能のままに愛する兄へと駆け寄った。ヘンゼルも同じく駆け出した。

二人の兄妹は、別れて数年の月日が経つ。グレーテルは養子へ行った後幸せに過ごしてきたが、愛する兄に逢えないというのは何より辛かった。子供の頃は歳の離れた兄によく可愛がってもらい、沢山の愛情を注がれて、誰よりもヘンゼルのことが好きだった。

「どうして、ここが分かったの？」

「養子に行ってから、私はお兄ちゃんのことを忘れられなかった。だから私、大人になってからお兄ちゃんを探し続けたの。で、ようやくこの場所がつかめた。生きている内にお兄ちゃんに逢えて、私

……」

グレーテルはそのまま泣き崩れた。優しい兄は、そんな弱い妹を優しく抱き寄せる。グレーテルはヘンゼルの胸に顔をうずめ、ボロボロの服を涙で濡らした。彼女の頭をヘンゼルは優しく撫でる。

女神は二人の仲が一切面白くなかった。ヘンゼルがグレーテルと仲良くじゃれあっているのは、それがたとえ血の繋がりがあっても許せなかった。そんな彼女の心情を察したかのように、グレーテルはそのままの体勢で女神に言った。

「あなた、誰？」

「私はこの泉の女神よ」

「さつき、お兄ちゃんと何しようとしてたの」

どうやらさつきヘンゼルとしようとしていたことを見られていたらしい。だが、その方が好都合に思えた。女神は皮肉めいた口調で言う。

「あなたには分からないの？ キスよ」

「へえ……」

グレーテルはそのまま背伸びし、ヘンゼルの唇を、半ば無理やり奪った。

予想していたことだが、やはりヘンゼルは大きく動揺した。いくら愛しているといっても血の繋がりがあつた兄妹。理性が働き、彼は無理やりグレーテルを突き放した。その光景に、女神は不敵な笑みを浮かべる。

「ふふ、嫌われちゃったわね」

衝撃で地にへたり込みながら、女神へと憎悪の視線を送りつける。しかし、一切動じない。

グレーテルはヘンゼルに向き直った。

「やっぱりあの女の匂いがする」

先ほどの鉄の斧を手にし、それを女神に振りかざした。

女神はそれを紙一重で後方にかわしたが、彼女にも焦りの表情が見られる。ヘンゼルは驚き、声も出なかった。

「な、何するのよ!」

「あんたがいるから、お兄ちゃんは私のこと嫌いになるのよ……。あんたがいなければ、お兄ちゃんは私のものなんだから!」

二撃目、高々と手を上げ、それを一直線。縦に振り下ろさんとする。

「やめろ、グレーテル」

ヘンゼルが後ろからつかみ、グレーテルの攻撃を制止した。

「離してお兄ちゃん、私たちの愛を邪魔する奴はこの世には必要ないの!」

「お前は間違ってる。よく聞け、僕とお前とじゃ血の繋がった兄妹なんだ」

「だから何なのよ、私は赤の他人であるあいつなんかにお兄ちゃんを取られたくないの」

彼女は阿修羅の如く恐ろしい形相を浮かべていた。ヘンゼルの手を振りほどき、グレーテルは斧で女神を切りつけた。切られた箇所から鮮血が迸る。

「きゃあああっつ」

耳を劈かれるかのような鋭く高い断末魔が響く。ヘンゼルは思わず目を伏せたくなったが、それは自分が許さない。事の発端は自分でもある。彼は無理やりグレーテルの手から斧を強奪した。

女神にはまだ微かに息があった。今すぐ手当てすれば助かる見込みがある。斧を傍に置き、倒れている女神を抱き寄せ、必死に呼びかける。

「今助けます、しっかりしてください」

「うっ、お前……」

声にならないような声で。しかし、彼女には安堵の表情が浮かべられていた。

しかし、その表情は一変する。

「死ね!」

グレーテルは鉄の斧を拾い、それを振りかざした。



「やめろ!!」

一閃、ヘンゼルの言葉虚しく女神の首と胴を切り離した。  
断末魔も無く、女神は絶命した。

「そんな……。女神様」

動かない女神の死体を前に、ヘンゼルは泣き崩れた。やはり、やりきれなかった。愛する人を、実の妹に殺された。悔しさと憎しみが心の中で幾重にも交錯する。

グレーテルは斧を置き、しゃがみ込んで泣いているヘンゼルを背中から抱きしめた。その背中はかなり震えていた。

「お兄ちゃん、これで邪魔者は消えたよ」

「う、るさい」

小さく、聞こえないほどの声量でヘンゼルが言う。

「へ？」

グレーテルが聞き返す。刹那、ヘンゼルは声いっばいに叫んだ。  
「うるさい、うるさいうるさい!!」

背中のグレーテルを力いっばい突き飛ばした。

グレーテルはそんな兄を見て、呟く。

「可哀そうなお兄ちゃん、心も体もあの女に毒されちゃったんだね」  
ヘンゼルは答えない。女神の亡骸の前でただ泣いていた。

「あたしがその毒を取り除いてあげなきゃ」

虚ろな表情で血に塗れた鉄の斧を拾い、握り締めた。

「お兄ちゃんー!!」

振り落とされた斧は先程と全く同じように胴体と首を切り離し、ゴトリ。ヘンゼルの首が音を立てて落ちた。

「フフ、フフフフ」

グレーテルは兄の生首を掴んだ。目は閉じられ、どこか安楽の表情を浮かべているようにも見える。

「お兄ちゃん」

動かない兄のそれを自分の顔の位置に持ってくると、その生首にキスをした。冷たい感触が伝わる。

数十秒ほど唇を重ねていた。やがてそれをやめ、斧でヘンゼルの体を更に切り刻み始め、体から肉片を飛び散らせた。

彼女はヘンゼルの肉片を集め、それを口にした。口元が血で汚れるが、それですら彼女には喜ばしく感じられた。新鮮な血の臭いが口の中に広がる。

「これで、お兄ちゃんは私の中でずっと生き続けるんだよ……」

彼女はその後、兄の肉片を食べ続けた。

（後書き）

ちょっとした自信作のつもりなんですよね。是非評価おねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2192f/>

---

ツンデレな女神とヤンデレな妹に愛されて夜も眠れない

2010年10月8日14時20分発行